

甦る嘉助の怨念

松本領内の農民のほとんどが加わった貞享騒動の顛末は、土地の悲劇として語り継がれていたに違いありません。しかし、藩政期では罪人として処罰された嘉助たちを表立って語ることは憚られました。多田嘉助が、その怨念と共に再び人々の前に姿を現したのは、事件から二百年以上も後の明治時代のことでした。

明治七年（一八七四）、征韓論に敗れた板垣退助は、野に下ると愛国公党を結成し、明治政府を薩長閥の専制政府と批判して、民権議員の設立と納税者への参政権を訴えました。これを皮切りに各地で自由民権運動が高揚します。運動家は、庶民の間に民権思想を浸透させるため、百姓一揆の指導者を自由民権運動の先駆者として担ぎ、彼らをモチーフにした演劇や小説を発表しました。



貞享騒動を知ることができる貞享義民記念館（貞享義民社そば）



貞享義民顕彰慰霊の碑（貞享義民記念館むかい）